

論 説

順天堂大学医療看護学部 医療看護研究19
P.82-90(2017)

罪悪感と償いに関する心理学的考察

－イアン・マキューアン「贖罪」と中島京子「小さいうち」をめぐる－

Psychological Consideration of Guilt and Atonement in the Novels
Atonement by Ian McEwan and *The Little House* by Kyoko Nakajima

山 岸 明子¹⁾
YAMAGISHI Akiko

要 旨

親しい他者の幸福を阻んでしまったことから罪悪感に苛まれる主人公を描いた2つの小説－イアン・マキューアン「贖罪」と中島京子「小さいうち」を取り上げて、主人公ブライオニーとタキのもった罪悪感はどのようなものか、その罪悪感に対して2人はどのような行動をとったのかについて、心理学の観点から考察を行った。どちらの主人公も傷つけた他者に焦点がある罪悪感をもったが、ブライオニーの罪悪感「自分がやったこと」にも焦点を向けているのに対し、タキの場合は自他の行為の不均衡に基づく罪悪感－日本人にもたれやすい罪悪感が中核にあることが指摘された。2人の行為は加害の重大性等が異なるため、罪悪感の強さやとられる行為も異なったが、どちらも晩年に罪悪感に関する経緯を手記として綴っていたため、書くことの意味についても考察を行った。ブライオニーは贖罪のために否定的なことも全て誠実に書き、自分が傷つけた2人の人生を意味づけるための虚構を意図的につけ加えることで自分の人生を受容することができたのに対し、タキは否定的で嫌なことは隠蔽してしまったことで更に強い罪悪感が生じてしまい「絶望」に陥ってしまったことが示された。

キーワード：罪悪感、償い、心理学、人生の受容

Key words : Guilt, Atonement, Psychology, Acceptance of one's life

I. はじめに

我々はどのような時に罪悪感をもち、そしてそれに対してどのように対処するのだろうか。罪悪感やそれに対する贖罪は宗教の大きな問題であるし、心理学でも近年罪悪感の研究が盛んになされるようになり、特に对人的文脈を重視した研究が多くなっている (Tangney & Dearing (2002)¹⁾、有光 (2006)²⁾、大西 (2008)³⁾ 等)。但しそれらの心理学的な罪悪感研究は、被調査者に答えてもらえるような罪悪感を対象としており、生涯に

わたって影響を与えるような重大な罪悪感、実証的な研究では取り上げられていない。そのような罪悪感を実証的に検討することは倫理的にも問題が生じるため、本稿では文学作品を用いて心理学の観点から考察を行う。

取り上げるのは、親しい他者の幸福を阻んでしまったことから生涯にわたって罪悪感に苛まれる主人公を描いた2つの小説－イアン・マキューアン「贖罪」(2001)⁴⁾ と中島京子「小さいうち」(2010)⁵⁾－である。イアン・マキューアンは1948年生まれのイギリスの作家、1998年「アムステルダム」でブッカー賞受賞、「贖罪」は彼の代表作である。中島京子は1964年

1) 元順天堂大学
(before) Juntendo University
(Oct. 28, 2016 原稿受付) (Jan. 25, 2017 原稿受領)

生まれ、2010年「小さいうち」で直木賞を受賞している。どちらの小説も広く読まれ、各々ジョー・ライト監督、山田洋次監督により映画化もされている⁶⁾⁷⁾。

この2つの小説は、主人公がその恋の成就を妨げた人が戦争によって亡くなってしまい、加害者である主人公は償うこと、許されることが不可能になってしまうという点、また主人公が自分の経験したことを晩年になって文章に書き、それを読者が読むという構成をとっているという点で共通性が見られる。更に「贖罪」は主人公が10代であった1936年から1940年の出来事を77才になった主人公が回想し、「小さいうち」は主人公が10～20代であった1932年から1946年頃の出来事を「すでに米寿を超えた」主人公が回想するというように、時期的にも大変似ている。また主人公にとって重要な親しい年長者の恋の成就を妨げたことに、戦争という不幸な出来事が加担して、加害が固定されてしまうことも共通している。

但し罪悪感をもたらず行為の重大性はかなり異なっており、また作者の国籍が異なり、舞台となる場所もそれぞれロンドンと東京を中心としていて、文化的な違いが予想される。更に「贖罪」の主人公は大邸宅に住みケンブリッジ大学に行く予定だった文学少女で、後に有名な作家になったエリート女性であるのに対し、「小さいうち」は尋常小学校を卒業後、農村から女中奉公のために上京してきた少女が主人公であるという点でも異なっている。そしてもたれた罪悪感やその後の行動にも違いがみられ、山岸(2010)⁸⁾で提唱された4つの罪悪感の異なったタイプの罪悪感が描かれていると思われる。

以上のように2つの小説は状況的に似ているところと違うところがあり、もたれた罪悪感やその後の行動、なぜ主人公は書いたのか、何を書いたのかに関しても、似たところと違うところがあると考えられる。それらについて検討しながら、他者に加害を与えてしまい、償うこと、許されることが不可能になってしまった時、人はどうしようとし、何ができるのか、著者はそれをどう考えているのかを論じようと思う。

2つの小説について論じる前に、まず本論の考察に必要なと思われる心理学的な知見について述べておく。その一つは望ましくない行動をしてしまった時にとられる行動について、もう一つは望ましくない行動をしてしまった時にもたれる罪悪感にはどのようなものがあるか、その種類についてである。その後「贖罪」と「小さいうち」について、主人公が罪悪感をもつに

至った概略とその後の行動について述べた上で、2つの小説における罪悪感とその後の行動を比較しながら、人は何に対して罪悪感をもつのか、そしてそれを償うこと、許されることが不可能になってしまった時、どうしようとするのか、何ができるのかという問題についての著者の考えを明らかにし、山岸(2010)⁸⁾大淵(2010)⁹⁾の枠組みを中心に心理学の観点から考察を行う^(注1)。

II. 望ましくない行動をした後の行動

他者に対して望ましくない行動をしてしまった時とられる行動について、社会心理学では、まずそのことから生じる悪い評価を避け、社会的関係の悪化を防ぐために、釈明がなされるとする(大淵、2010)⁹⁾。釈明(account)とは「負事象(失敗、規則違反、他者への危害)との関連が社会的に問われるような状況で、個人が試みる公的な言語的説明」と定義づけられているが、釈明には4つのタイプ-謝罪・弁解・正当化・否認-がある。大淵(2010)⁹⁾によると、この4つは「加害行為への関与」「加害行為の不当性」「結果に対する責任」の3要素によって区別され、「加害行為への関与」を認めないと「否認」、「加害行為の不当性」を認めないと「正当化」、「結果に対する責任」を認めないと「弁解」、全てを認めると「謝罪」をされるとされる。

また道徳的に望ましくない行動-規範からの逸脱や他者への加害等-を自分がしたと思った時には、罪悪感を感じ、自分がしてしまったことについて謝罪し、加害を修復しようとして修復的・賠償的な行動をすることが指摘されている¹⁾²⁾。そのような行動は対人的な亀裂を修復し、対人関係を良い方向に変えるし、本人の評価も上がるという適応的な機能がある。賠償的な行動は、苦痛を感じている被害者にとってプラス、加害者にとってはマイナスになるような行動を加害者が自らとすることで、人間関係における公平性を回復させるという効果ももたらす。更に罪悪感が第3者への向社会的行動を動機づけることも多くの研究で示されている(Hoffman, 2000¹⁰⁾等)。一方罪悪感が強すぎる場合は不適応的になり精神病理を引き起こしたり、時には自己破壊的な行動をするという否定的な側面もある。

他者に対して危害を与え、「加害行為への関与」「加害行為の不当性」「結果に対する責任」を認めた時に、罪悪感が持たれて「謝罪」がなされるが、謝罪や賠償によって相手から許され、悪化した人間関係が修復さ

れば、罪悪感は解消される。一方相手からの許しが得られない場合は、罪悪感は解消されない。

相手から許しが得られない場合に、解消されない罪悪感を弱めるために取られる行動として、上記のことを参考にすると以下のことが考えられる。1) 謝罪や賠償を続ける。2) 罪悪感を弱める様に、認知や記憶を変える（否認－事実を忘れる・認めない、正当化・弁解・合理化－都合良く変更する等）。3) 謝罪を他に向けて（方向・対象）、誰かが利するような向社会的行動をする。4) 自罰的行為（相手の苦痛と見合う苦痛を自分に課す）。賠償と共に公平性の実現を目指しているが、賠償は相手に向けられ許しを得る可能性があるのに対して、自罰的行為は相手と無関係に行われる。以上の対処で弱まらない場合は、5) 苦痛やわだかまりを抱えて生きることになり、時には自罰的行為の究極として自死する場合もある（cf. 漱石の「こころ」の先生）。以上のような対処が考えられる。

Ⅲ. 望ましくない行動をした時にもたれる罪悪感

Ⅱ. で述べた行動は、望ましくない行動をしたためにもたれる罪悪感を解消するためでもある。では罪悪感のもたれ方－どのような時に何に対してもたれるのか－は、人によって、状況によって異なるのだろうか。山岸（2010）⁸⁾ は罪悪感についての心理学における研究のレビューを行い、罪悪感が何に対してもたれるのかに関して、4つの型に分けて考察を行っている。その第1は善悪の基準に照らし合わせて悪いとされることをしてしまったことによる罪悪感、第2は他者を傷つけたことによる罪悪感である。心理学の研究は第1の罪悪感から始まり、1990年代から対人的な罪悪感の研究が盛んになったことが論じられている。第1の罪悪感「自分がしたこと」に焦点があり「規範（あるいは良心や信念）に照らして自分の行動は合っているのか、自分は正しいのか」が問われる。それに対し第2の罪悪感「自分がした行動の是非そのもの」よりもその結果「傷つけてしまった他者」に焦点があり、自分が相手を傷つけたこと、相手の期待や気持ちに応じず、そのことが他者に与えた影響ゆえに感じられる。これらの罪を許すのは、第1の罪悪感では神や自分自身、第2の罪悪感では傷つけた他者である。

この第1、第2の罪悪感では自分が行った行為とその結果を問題にしているのに対し、自分の行為だけでなく自分と他者の行為を比較するかどうかの観点を入れて、比較の結果不均衡があり自分の方が優位な状況に

ある時にもたれる罪悪感が第3、第4の罪悪感である。第3の罪悪感には相手と相互作用をした結果として不均衡が生じた時（例えば相手が得ているものや失ったものと自分のそれが大きく違っていたり、相手がやってくれたのにこちらはやっていないというような不均衡）にもたれ、第4の罪悪感には相互作用をもっていない者と自分を比較した時の不均衡に基づく罪悪感（例えば自然災害や戦争、事故等で生き残った場合に「なぜあの人は死んだのに、自分は生きているのか」と感じる「生存者の罪悪感」や、自分の恵まれた生活と他者の豊かでない生活との違いに気づいてもたれる罪悪感）である。

第3の罪悪感では、自分が他者を傷つけたり悪事を働いたのに、自分は償わず、相手もそれを責めたり仕返しをして不均衡を解消しようとせず、反対に許されてしまった時にもたれる罪悪感であるが、罪悪感の研究のレビューで該当するものはほとんどなく、わずかに日本において実証科学ではない領域で言及されていることが論じられた（例えば母を恨み殺そうとしたのに、母は咎めず病気になった自分を手篤く看病してくれたことからもたれる阿閨世コンプレックス。あるいは世話になり迷惑をかけたのに、自分は相手に何も返しておらず、相手はそれを許し配慮し続けてくれることに気づかせる内観療法。更に西欧とは異なったイエス像を描いた遠藤周作の小説－「死海のほとり」「イエスの生涯」－でも描かれていることが指摘されており、日本人には理解されやすくもたれやすい可能性が指摘されている。これから取り上げる2つの小説で主人公がもつ罪悪感、この分類の第1、第2、第3の罪悪感¹⁰⁾と関連していることを以下に述べる。

Ⅳ. 「贖罪」

1. 罪悪感をもたれるようになる経緯

13歳の文学少女ブライオニーは、夏のある日、姉セーリアと使用人の息子で幼なじみのロビー（共にケンブリッジ大学に通っている）の逢瀬を目撃し、大人の恋についての無知からその関係を誤解する。ちょうどその日、遊びに来ていた従姉が性犯罪に会うという事件がおこるが、ブライオニーは姉をロビーから守るため、また嫉妬心もあって、見てもいないのにロビーを性犯罪の犯人として告発してしまう。ロビーは無実の罪で刑務所に送られる。セーリアは妹の告発を信じた家族を許せず、家を出て看護師になる^(注2)。ロビーは3年半服役し、イギリスが参戦すると入隊する。

2人の心のつながりは強く、ロビーはそれを支えに悲惨な状況を生きていく。

ブライオニーはその後セシーリアとロビーが愛し合っていること、自分の無知とそのことが引き起こしたことの重大性に気づき、罪悪感から大学に進学せずに、看護師の見習いになって、厳しい状況に身を置き、また証言を取り消そうと考えて、姉に手紙を書く。そして戦下の病院で働きながら小説を書き続ける。

物語はⅠからⅢ部及び現在の語りからなり、Ⅰ部は主としてブライオニーの視点から、セシーリアとロビーがお互いへの愛に気づくが、ロビーは逮捕されてしまう夏の日が描かれ、Ⅱ部は戦地にいるロビーの視点から、悲惨な戦争とセシーリアやブライオニーとのことが回想で語られる。Ⅲ部は見習い看護師になったブライオニーの視点から、自分のやったことの回想とそれへの思い、病院での仕事、そしてセシーリアやロビーと会い謝罪するが許しは得られないことが語られる。

ブライオニーは嘘の告発をしたことで2人の人生を狂わせ、彼等の幸せを阻んでしまった自分の行動を悔い、罪悪感に苛まれる。そして作家を目指すブライオニーは、夏の日からのことについて何度も草稿を書き続ける。そして1999年、77歳になり脳血管性痴呆を患っているブライオニーは、最後の作品として、初めて書いた作品を改稿したものを含む小説を発表する。その事情が最後の章で書かれ、今まで読んできたⅠ部からⅢ部は彼女が最後に書いた小説であることを読者は知る。そしてブライオニーがセシーリアとロビーに会って謝罪をする場面は、実はブライオニーの生み出した虚構であって、現実にはセシーリアとロビーは二度と会うことなく、戦争中に命を落としていた…ということが明かされる。

2. ブライオニーが犯した罪とその後の行動

前述のように、ブライオニーは無知と誤解から嘘の告発をしてしまい、姉セシーリアとその恋人ロビーの人生を狂わせ、2人の幸せを阻んでしまう。自分が何をやったのか、自分の思い込みがもたらした結果の重大さがわかるようになると、ブライオニーは、罪悪感から大学に進学せず、つらいことそして実際に役立つことを求め、看護師の見習いになる。また嘘の証言を取り消そうと考えて、姉に手紙を書く。

ブライオニーの行動はⅡで述べた罪悪感を解消・弱める行動と一致している。ブライオニーは自ら厳しい

状況を求めて家をでて、見習い看護師になり、戦下の病院で働く。そして戦争で傷ついているかもしれないロビーの代わりに負傷兵の看護に懸命に携わり、その負傷兵が実はロビーで、自分を許してくれることを夢想したりする。彼女は、被害者と同様のつらさを担おうとし（公平性の実現）、また向社会的行動への志向も示している。しかし罪悪感が弱まることはない。自分の罪を自覚したブライオニーは、修復のための行動－証言の取り消し－をおこす準備もすすめる。

しかし、2人は亡くなってしまう。もう何をしても許してもらえず、償うことも全くできなくなったブライオニーに残された可能なことは、書くことだけであった。第1稿はまだ2人が生きていた1940年に病院での激務の合間に書かれるが、この時は肝心なことは書かれない。その後の改稿では「何事をも偽らず」「全ての事情を歴史的記録として書くこと」が目指される。しかしいくら書いても、セシーリアやロビーが読み許してくれなければ、償いにはならない。それでも、許されることはありえなくても、彼女は生涯改稿を続ける。

そしてブライオニーは最終稿で書く。「ふたりが二度と会わなかったこと、愛が成就しなかったことを信じた人間などいるだろうか？ 陰鬱きわまるリアリズムの信奉者でもないかぎり、誰がそんなことを信じたのだろうか？ わたしはふたりにそんな仕打ちはできなかった。わたしはあまりに年老い、あまりにおびえ、自分に残されたわずかな生があまりにいとおい。わたしは物忘れの洪水に、ひいては完全な忘却に直面している。ペシミズムを維持するだけの勇気がもはやないのだ。」ブライオニーは、読者のため、あるいは自分のために彼らを幸せにしたように書いているが、一方で「わたしは思いたい――恋人たちを生きのびさせて結びつけたことは、弱さやごまかしではなく、最後の善行であり、忘却と絶望への抵抗であるのだ」とも書いている。

V. 「小さいうち」

1. 罪悪感がもたれるようになる経緯

米寿をすぎたタキが出版社に「懐かしい昭和期の東京のお話」を頼まれて、平井家で女中奉公していた時の話を書き始める。タキにとって女中奉公は、頭のよさが必要とされる誇り高い仕事で、「奥様や坊ちゃんと過ごした大切な思い出」が語られる。日本が戦争に傾き、やがて戦争になっていく大変な時代なのだが、東京の中産階級の暮らしは楽しく、若いタキは美しい

奥様（時子）と可愛いぼっちゃん（恭一）と心豊かな日々を過ごしていた。

しかしやがてタキは、旦那様の会社の社員でよく平井家に遊びに来ていた板倉と奥様の関係に疑いをもつようになる。18年秋、板倉に召集の知らせが来る。板倉が平井家に挨拶に来た翌日、出かけようとする時子をタキが止める。誰かに見られて不倫の噂を立てられることを心配したタキは、明日会いに来てほしいという手紙を板倉に出すことを時子に勧め、時子は腹を立てつつ、タキに手紙を預ける。そして翌日の午後、板倉はやってきたが、「二人が何を話したのかは、庭仕事をしていたのでわからない」とタキは書いている。

19年、東京も空襲の恐れがでてきて、3月、タキは山形の実家に帰ることになる。学童疎開の子の世話をしていた彼女は、20年、東京に行く仕事ができ、奥様に再会する。時子は出征する板倉に会いに行くのをタキが止めたことについて、「気遣ってくれたのよね。突っ慳貪になっちゃって、気にしてたのよ、ずっと。話せて良かったわ」と言う。その後のことについては「大事なことを何も知らずに、私の日々は続いた。いつの間にか、私の毎日は、大切な事を追い越した」と書かれるだけで、戦争が終わったことを簡単に書いてタキの文章は終わる（「大切な事」というのは、実は時子の死であることが後でわかる）。

最終章は、タキ亡き後、手記を遺された甥の息子の健史による語りであるが、最晩年のタキは「『思い出すのは後悔ばかりなの』と言って、顔をぐしゃぐしゃにして泣いていた」と語られる。そしてタキは21年に東京に行き、時子が空襲で死んだことを知らされたということが明らかにされる。恭一の居場所を知った健史は恭一に会いに行く。彼は80歳近くになっているが、健史は彼にタキの遺品にあった封書-時子の署名がある開封されていない封書を渡す。その手紙は、出征前の帰郷前日に時子が板倉宛に書いた手紙であり、タキはそれを板倉に渡していなかったことが、66年後に明らかになる。タキは死ぬまで62年間その手紙を持ち続けていたのである…。

2. タキが犯した罪とその後の行動

タキは時子が板倉に会いに行こうとするのを迷いながら止める。戦時下に不倫なんて絶対いけない、止めるべきか。いや奥様の望みが叶うようにすべきなのか。女中のすべきことはどちらなのか、タキは迷う。そしてタキは、明日会いに来てほしいという手紙を板倉に

書くこと、それを自分が届けることを提案する。会いに行ったところを見られるのは問題だが、板倉が家にくるのなら何とでも言い訳はつくからという理由で、時子を説得する。そして「来なかったらお諦めになって下さい」と言う。

しかしタキはその手紙を届けなかった。手紙は板倉に届いていなかったのだから、板倉は来なかったはずである。出征した板倉からは葉書ひとつ来ないと後に時子は言っているが、会っていれば（そして関係をもっていたのであれば猶更）手紙を書くだろう。時子と板倉が最後に会ったこの場面はタキによる虚構と考えられる。

「どちらが女中のすべきことなのか？」を考えた結果こうなったと言っているようだが、それだけであればこれ程後悔しないと思われる。それにタキの考えでは、板倉が家に来ることは問題ではなかったのである。タキが手紙を届けなかったのは、彼女が言う「女中のすべきこと」以外の要素が入っているからだと思われる。奥様への同性愛的な思い、板倉への思い（タキも実は板倉に惹かれていたことの記述が控えめに書かれている）、奥様との今の幸せな状態を壊したくない、大切な2人（奥様と坊ちゃん）をそのままにしておきたいという思い、それらが混ざった女中としての職務とは異なった個人的な思いも、奥様の願いを阻むことに関与していると考えられる。

2人が会うことを自分が阻み、そして時子は多分板倉と関係を持つことなく死んでしまった。板倉と結ばれるという時子にとって大切な経験、人生の充実感が大きく変わったかもしれないことを自分が阻んでしまったという罪悪感。しかし女中の責務を考えてやったという理由があるため、タキの罪悪感はそれなりに鎮められていたと思われる。実際タキの記述は乱れることなく、しっかり書かれている。それなのに、なぜ最晩年のタキは辛そうに大声で泣いていたのであろうか？タキの罪悪感には上述のことだけではないのではないかと考えられる。

タキの手記で強い罪悪感が現れるのは、時子と再会し、時子がタキに謝った場面の後である。板倉に会いに行くのをタキが止めたことについて「『気遣ってくれたのに、突っ慳貪になっちゃって』とさりとそれだけおっしゃると、縁側のほうへ行かれた。」の文章が続き、すぐ章が変わる。そして急に「私は一体何を書こうとしていたのだったか。胸を抉るような後悔が、こんな年になってもまだ襲ってくる。」という文章に

なる。

タキの罪悪感、2人が会うことを自分が阻んだのに、そのことを時子は全く知らず、その時の自分の言動についてタキに謝ったことに由来しているのではないか。時子は手紙は渡されなかったということを全く知らず、自分のことを信用しきって、自分に謝ってさえくれていることをタキは心苦しく思ったと思われる。その時彼女は自分のしたことを告白し、許しを乞うこともできなかった。なぜなら彼女は時子と自分のよき関係、大切なものを守るために時子をだまし、そして関係の維持のためにそのことを胸にしまっているのだから。でもいつかはわかってもらえる時が来ると思っていた。しかしそれも時子の死によって不可能になってしまった。自分がやったことを「どうやって書いたらいいかわからない」タキは、後悔の内容を生涯誰に語ることもなく、手記にも書けないまま死んでいったのである。

タキが生涯結婚しなかったのは、時子が板倉と関係を持たないまま死んでしまったからであり、その原因が自分にあると思っているからと思われる。彼女にとって時子は昔のよき思い出の源泉であると同時に罪悪感の元でもあったが、但し書き出した当初はよき思い出を書くつもりで、楽しく得意気に書いていた(罪悪感はいずれに鎮められていた)。しかし「書いて

いる内にとじておいたものが蓋を開けて、幾通りものやり方で責め立てて」きて、生じてきた罪悪感のために最後の方は結局書けなくなってしまうのである。

VI. 2つの小説における罪悪感とその後の行動

以上のべてきたことを、罪悪感をもたらした行為、もたれた罪悪感、罪悪感への対処、手記を書くこと等に関する19の項目に分けて対比させてまとめたものを表1に示した。

1. 2人の主人公の罪悪感

今まで述べてきたように、どちらの小説の主人公も親しい人の恋の成就を妨げて、相手の幸せを阻んでしまったことと関連して罪悪感をもつようになるが、罪悪感をもたらした行為は大きく異なっている。

ブライオニーの場合は、嘘の証言で無実のロビーを犯罪者にしてしまい、姉とロビーの人生を滅茶苦茶にしてしまうという他者の人生全般に重大な影響を与える行為である。その因果関係は明白であるし、社会的・法的にも問題になるような重い罪である。そのため、ブライオニーの罪悪感是非常に強く、彼女は生涯にわたり罪悪感を背負い続け、贖罪の人生を送ることになる。

一方タキは頼まれた手紙を渡さないことで時子の不

表1 2人の主人公の罪悪感とその後の行動の比較

	ブライオニー	タキ
罪悪感をもたらした行為	嘘をついて無実のロビーを告発→2人を引き裂く-幸福を阻む	嘘をついて不倫を阻む→会えなくなる(-幸福を阻む)
行為の重大性	大	大きくない
社会的・法的問題	あり	なし
行為の意図	姉を守るため	奥様の家族を守るため
隠された意図	嫉妬心	自分の気持・欲求
加害の明確性	明確	必ずしも明確ではない
罪悪感	強い	強くない
第1の罪悪感	あり	なし
第2の罪悪感	あり	あり
第3の罪悪感	なし	あり
対処 謝罪・賠償	謝罪の手紙 証言の取消しの手続き	なし
謝罪の気持の継続	草稿を書き続ける	手紙を未開封のまま保持
認知・記憶の改変	幸福な虚構を書く	話を都合良く作り変える
向社会的行動	看護師になって負傷兵のケアをする	なし
自罰的行動	大学に行かず看護師になる	独身を通す
手記 書く理由	贖罪のため	原稿を依頼され思い出の記を書く
方針	ありのままに書く	書きたいように書く
虚構を書いた理由	2人の幸福のため	自分がやったことを隠すため
結果	最後の善行と思える	罪悪感に苛まれる

倫を阻み、2人が関係をもたないようにしたが、プライオニーの場合のように人権にかかわる問題－社会的・法的に問題になるようなことではなく、行為の重大性は大きくない。タキの行為がどのくらい2人に影響を与えたのかも必ずしも明白ではなく、少しとらえ方を変えれば罪悪感を意識化しないことも可能で、タキは手記を書き出す時にはほとんど罪悪感を意識していなかったようである。

但しどちらの場合も彼女たちの行為には明確な理由・意図があった。プライオニーの行動も彼女なりの正義に基づいたものだった。姉の貞節を庇護し、姉を襲おうとする階級秩序の侵犯者を罰するという使命感に満ち、得意気でさえあった。タキの決断も旦那様や坊ちゃんを守るためであったし、不倫（しかも戦時中）を阻むのは常識的・一般的には正しい行為でもある。但し2人ともそれだけではなくて、本人の隠された欲求も関与しており、そのことも罪悪感をもつことにつながっていると思われる。そしてプライオニーの場合は、自分の意図は未熟さ故の誤解であったことに後で気づく。信念に基づいて行っていたつもりだったのに、自分の過ちであったということもプライオニーの自尊心を傷つけ、自分へのネガティブな思いを強めたと考えられる。

プライオニーの行動は、姉を守り色情狂を罰するという理由からなされたもので、当初は「自分は正しい」と思っていた。そのため、実際に見たわけではないという不安を持ちながらも、法廷で嘘の証言をして有罪を決定的なものにしてしまう。そのことへの悔いがはじめて語られるのは、4年後が語られる第Ⅲ部で、大学に進学せず見習い看護師になったことを書いている時である。彼女は大学での勉学を諦め、青春時代を犠牲にすることを選ぶが、それでも「自分は許されざる者なのだ」という強い罪悪感を表明している。

このあたりの罪悪感は、「正しくないことをしてしまった自分」に焦点があり、第1の罪悪感の色彩が強い。「許されざる者」という表現は規範を犯してしまった者の意であり、許す立場にあるのは規範の基にある「神」のような者であり、被害者ではないと思われる。

プライオニーが草稿で「加害を加えた他者」への思いをはじめて語るのは、同僚の話聞きながらロビーのことを考える箇所である。「ロビーにもしものことがあったら、セシーリアとロビーが二度と会えなかったら…。今にして、戦争が自分の罪を倍加させる可能性が理解できたのだった。」そしてセシーリアに謝罪

の手紙をだす。この時点では被害者2人から許される希望はまだあった。負傷兵の手当てをしながら、それがロビーで、彼女の手当に感謝して罪を許してくれる場面を夢想したりしている。

その後のプライオニーは「加害を加えた2人」にいかにしたら償えるかを問いながら生きることになる。死んでしまった彼等からの許しは得られないのに、それでも償うことを求めて生きていく。他者を傷つけたことに由来する第2の罪悪感の解消をひたすら求めるが、一方プライオニーの関心は「正しくないことをしてしまった自分」にも向けられており、第1の罪悪感—自分がやったことに焦点がある罪悪感—も合わせ持っていると考えられる。

一方、タキは「女中としてすべきことは何か」を考え、2人を会わせないという決断をした。自分としてはそれは正しい判断だと思っているのだが、2人が会うことを自分が阻んだため、時子はおそらく板倉と関係を持つことなく死んでしまった。時子は板倉と結ばれることで人生の充実感が大きく変わったかもしれないのに、その大切な経験を自分は阻んでしまった、その心の痛みをタキは感じている。これは「自分の行動が他者を傷つけたこと、自分の行為が他者に及ぼした影響」に焦点がある第2の罪悪感といえる。但しこの罪悪感は前述の様に、タキにとって大きいものではなかった。タキを苛んだ罪悪感は、2人が会うことを自分が阻んだのに、そのことを時子は全く知らず、その時の自分の言動についてタキに謝ったことに由来していると考えられる。タキは、時子が自分が手紙を渡さなかった事を知らず、自分のことを信用しきって自分に謝ってさくれたこと、自分は時子の幸せを阻み、恨まれる様なことをしたのに、彼女はそれを知らず優しくしてくれる。タキが感じている罪悪感はその不均衡に対するものであり、それは第3の罪悪感と考えられる。自分がやった行為そのものの加害性より、自分のやったこと・やらなかったことと時子の言動との不均衡。自分は謝っていないし償ってもいない、自分の人生で一番重要だった人に一番重要なことをしていないという事に気づいて、タキは絶望して大声で泣いていたのだろう。

第1の罪悪感「罪悪感」として最も一般的でわかりやすいし、第2の罪悪感もよく言及されるが、「小さなうち」はそれらだけでなく日本でのみ言及されている第3の罪悪感を取り上げているところがユニークであり、「贖罪」と大きく異なっていると考えられる。

2. その後にとられた行動と書くことの意義

罪悪感を持ってしまった後、ブライオニーは様々な対処行動をとっている（表にまとめたように、全ての対処を試みている）。しかしセシーリアとロビーが亡くなってからは加害を加えた2人への謝罪の道はなくなり、彼等に直接償うことはできなくなる。作家になったブライオニーに残された可能なことは、書くのを続けることだけであった。第1稿では贖罪の意識はなく、肝心なことは書かれないが、その後の改稿では贖罪のため「何事をも偽らぬ事を義務と考え、全ての事情を歴史的記録として書く」ことが目指される。いくら書いても彼等から許されることはなく、第2の罪悪感に対する償いは不可能であるが、それでも彼女は生涯改稿を続ける。そして脳血管性痴呆症になり「物忘れの洪水や完全な忘却に直面し」その作業を続けられなくなるという時、彼女は幸福な2人を描くことを思いつく。「弱さやごまかしではなく、最後の善行であり、忘却と絶望への抵抗」として、あの結末を書いたと述べている。彼らは確かに惨めに死んでいったが、内的にはブライオニーが書いた様な幸福な思いを持ったかもしれない。空想の中だけであっても、彼等がもったその思いこそ彼等が生きた証であり、それを文章化することはその思いをこの世に残すことにつながる。「わたしの最終タイプ原稿がたったひとつ生き残っているかぎり、自恃の心強さ、幸運な私の姉と彼女の医師王子は生きて愛し続けるのだ」とブライオニーは高らかに書いている。たとえ彼等からの許しは得られなくても、幸福な2人を描くことによって、ブライオニーは罪を犯し贖罪のために語り続けてきた自分の人生を、無為だったのではなく意味があったとやっとう受容できたということなのだろう。そしてそれは、正しくないことをしてしまった自分に焦点を向ける第1の罪悪感に対する贖罪に近いように思われる。

タキの場合は、ブライオニーのような加害は与えていないし、「女中としての責務だった」と思っていたので、大きい罪悪感ももっていなかった（預かった手紙を捨てていないし、独身を通したのも背後に罪悪感があると思われるが、それ程大きいものではなかった）。タキの手記は、今の人が知らない女中奉公のことや、古き良き時代の暮らしぶり、自分の生きてきた過程をわかりやすく楽しく書こうとするもので、得意気に書き出している。なつかしい思い出を書くという意図なので、都合良く語られる面は当然あり、健史に「本当の事を書かなきゃだめだよ」と言われたりして

いる。タキは後悔の元になったことに関しては本当のことは書かず、「女中としての責務」の話としてだけ書き、手紙は渡したかのようにして虚構場面を書いており、自分がやったことの否認や合理化が試みられているといえる。しかし時子との楽しい思い出を書いている内に、タキは色々なことを思い出し、自分と時子とのやり取りの不均衡に気づいて重い罪悪感をもってしまうのである。

なお向社会的行動に関しては、ブライオニーが看護師になって苦しむ人々のケアをしており、性犯罪の真犯人（と示唆されている）マーシャルが後年社会慈善家になったことに関しても、著者は罪悪感の関与を考えているのかもしれない。

ブライオニーとタキは共に晩年に人生を振り返って手記を書いたが、表のように執筆の理由・方針は異なり、執筆が本人にもたらした結果も大きく異なっている。ブライオニーは2人の経験に関しては事実とは全く異なった虚構を描いたが、自分自身に関しては贖罪のために最終稿で否定的なことも全て冷徹に書いている。それに対しタキの場合は贖罪の意図はなく、自分にとっても読者にとっても楽しい「思い出の記」を書いたのであり、都合の悪いことは書かず、それを隠すために事実と違うことを書いたりしている。そして嫌なことを思い出した時は、なかったことにしようとするが、思いがけず否定的なことが次々とでてきて、対処できなくなってしまっている。

エリクソンは老年期の発達危機を「統合 対 絶望」とし、ネガティブな面もふくめて全てを受容すること、自分の一回限りの生涯をそのまま受容することを発達課題とした¹¹⁾。ブライオニーは書き続けた人生の最後に2人の幸せな場面を語ることによって彼等の生を意味あるものとし、そのことによって自分の人生をやっとう受容できたということがこの小説のテーマなのだと思われる。起こってしまったことは変えられないし、一生かかって語り続けても償いにはならないという「語ることの限界」を引き受けつつ、語り続けることで精一杯生きた一回限りの自分の人生を受容できたということをマキューアンは言っているように思われる（但し彼はそれを認めていないとする論考もある（Yata, 2005）¹²⁾）。

ブライオニーは自分の人生の全てを誠実に書き、そして自分が傷つけた2人の人生を意味づけるための虚構を意図的につけ加えることで、自分の人生を統合化することができた。一方、タキは嫌なこと、辛いこと

は隠蔽して書く中で、直面せずやり過ごしてきたネガティブな面が次々に湧き出てきて対処できず、「統合 対 絶望」の絶望に陥ってしまった。書くことが普段は気づかないことに気づかせ、心の奥にあることを引っ張りだし、混乱をもたらしてしまっている。そのような混乱も、更に書き続けること、そして時には安心して語ることが出来る他者（カウンセラー等、せめて健史）に話し、フィードバックを得たり援助を受けることで、ある程度統合化できたのではないかと思われる。

ブライオニーは肯定的なことも否定的なことも書くことで、自分の人生を受容し統合することができた(エリクソンの老年期の発達課題の達成)。それに対しタキは、嫌なこと、否定的なことは隠蔽してしまったことで、反対に「絶望」に陥ってしまった(タキの場合、手記を書かなければ発達課題の達成はなくても、罪悪感に苦しんで大泣きしたりせず亡くなったのではないかと思われる)。書くこと、人生を語ることは人生の総括に大きな意義をもつことが読み取れる。

以上、親しい他者の幸福を阻んでしまったことから罪悪感に苛まれる主人公を描いた2つの小説を取り上げて、主人公のもった罪悪感はどのようなものか、その罪悪感に対して2人はどのような行動をとったかについて、心理学の観点から検討を行った。2人は異なったタイプの罪悪感をもったこと、償いの仕方や自分の人生の受容に関しても違いが見られることが論じられた。

〈注1〉「贖罪」については文学領域で多くの研究論文が書かれているが(一方「小さいうち」について書かれている学術論文はほとんどない)、本稿は2つの作品の主人公の行動を山岸(2010)の枠組みを中心に心理学の観点から論ずる論文であるため、英文学の先行研究には触れずに考察を行った。

〈注2〉訳書では「看護婦」と表記されているが、現在の日本での呼称に従って「看護師」と表記した。

文献

- 1) Tangney, J.P. & Dearing, R.L.: Shame and Guilt. The Guilford Press (New York). 2002.
- 2) 有光興紀：罪悪感、羞恥心と共感性の関係, 心理学研究, 77, 99-104, 2006.
- 3) 大西将史：青年期における特性罪悪感の構造－罪悪感の概念整理と精神分析理論に依拠した新たな特性罪悪感尺度の作成, パーソナリティ研究, 16, 171-184, 2008.
- 4) イアン・マキューアン：贖罪(上)(下)小山太一訳, 新潮社, 2003. (Ian McEwan, Atonement. Jonathan Cape, 2001)
- 5) 中島京子：小さいうち, 文芸春秋, 2010.
- 6) Joe Wright：つぐない, ジェネオン・ユニバーサル, 2007 (DVD, 2012).
- 7) 山田洋次：小さいうち, 松竹, 2013 (DVD, 2014).
- 8) 山岸明子：罪悪感再考－4つの罪悪感をめぐって, 医療看護研究, 6, 64-71, 2010.
- 9) 大淵恵一：謝罪の研究－釈明の心理とはたらき, 東北大学出版会, 2010.
- 10) Hoffman, M.: Empathy and Moral Development: Implications for Caring and Justice. Cambridge Univ. Press, 2000. 菊池章夫・二宮克美訳. 共感と道徳性の発達心理学－思いやりと正義とのかかわりで, 川島書店, 2001.
- 11) Erikson, E.H.: Childhood and Society. Norton, 1950. 仁科弥生訳. 幼児期と社会, みすず書房, 1977.
- 12) Yata, K.: Showing off damaged bodies: Ian MacEwan's *Atonement*, 東京家政大学研究紀要, 45-1, 49-5, 2005.